

## ゴースト再考

中島, 楽章  
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

Nakajima, Gakusho  
Graduate School of Humanities, Faculty of Humanities, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/26231>

---

出版情報 : 史淵. 150, pp.69-116, 2013-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン : published  
権利関係 :



九州大学大学院人文科学研究院『史淵』第百五十輯抜刷  
二〇一三年三月発行

# ゴ―レス再考

中  
島  
楽  
章

# ゴージェス再考

中 島 楽 章

## はじめに

十九世紀末から二十世紀前半にかけて、日本の対外関係史研究では、「ゴージェス論争」が活発に続けられていた。「ゴージェス」(Gores)とは、十六世紀初頭のポルトガル史料にあらわれる、マラッカ(ムラカ)などに來航して交易を行っていた人々の名称である。この「ゴージェス」が日本人を指すのか、琉球人を指すのかについて、多くの研究者が考証を試み、その過程でポルトガル史料のほかにも、琉球史料・日本史料や、さらにはイスラム史料も紹介・検討され、十五〜十六世紀における、東シナ海域と南シナ海域を結ぶ交易の諸相について、多くの事実が提示されることにもなった。

このゴージェス論争は、『歴代宝案』などの琉球の海外通交に関する史料が新たに発見されるとともに、しだいに琉球説が優勢になっていったものの、戦前にはなお完全には決着がつかなかった。戦後はしばらく琉球史・南洋史研究自体が停滞していたこともあって、この論争も低調であった。その後は新たなポルトガルの重要史料が

翻訳され、また一九八〇年代以降、琉球王国の海外通交史研究が飛躍的に発展し、その東南アジア貿易の実態の検証が進められたことよって、「ゴレス」が琉球人であることは定説となり、現在にいたっている。それとともにゴレス論争は、すでに決着がついた過去の議論として、近年ではほとんど論及されることもない。<sup>1)</sup>

とはいえかつてのゴレス論争の過程で、多くの関連史料が検証され、琉球王国の海外通交史研究の萌芽期において、大きな意義をはたしたことは確かである。また一方で、ゴレスが琉球人を指すこと自体はまちがいないとしても、マラッカに來航した琉球人がなぜゴレスと呼ばれたのか、ポルトガル人がなぜ当初は彼らをゴレスと呼び、のちには琉球人 (Leynos) と称するようになったのかなど、なお未解明の問題も少なくない。またゴレス論争の過程で紹介された、ポルトガル語・アラビア語などの諸史料は、論争の退潮とともに、琉球史研究の活況にもかかわらず、ほとんど顧みられることがない。しかしこれらの史料には、単にゴレスの語源問題にとどまらず、十六世紀初頭の琉球王国の東南アジア貿易に関する有意義な情報も含まれているのである。

このため本稿では、まずゴレス論争の経過とその論点を整理したうえで、ゴレスに言及する諸国語の史料をできるだけ網羅的に紹介し、十五世紀中期以降のアラブ人航海者や、十六世紀初頭に東南アジアに進出したポルトガル人が、琉球人をアル・グールやゴレとして記録した理由とその歴史的背景について、再検討を試みてみたい。

## 一 ゴレス論争の進展とその論点

一連のゴレス論争の出発点となったのは、ポルトガルの第二代インディア総督であった、アフォンソ・デ・

アルブケケ (Afonso de Albuquerque) の事績を、庶子のブラス・デ・アルブケケ (Braz de Albuquerque) が叙述した、『大アフォンソ・デ・アルブケケ実録』 (*Commentarios do grande Afonso Dalboquerque*) の記事である。それによれば、十六世紀初頭のマラッカには、毎年二〜三隻のゴーストの貿易船が来航し、生糸・織物・陶磁器・小麦・銅・金塊などをマラッカにもたらしたという。このゴースト人の国はレケア (Lequea) と呼ばれ、彼らは色白で正直であり、長剣と短剣を佩用しており、交易が終わればすぐに帰国し、マラッカにとどまることはなかったとされている。<sup>(2)</sup>

この『アルブケケ実録』のゴースト記事に最初に注目したのは、日本では幕末の安政三年にあたる一八五六年に刊行された、ジョン・クロフォード (John Crawford) 『インド諸島と周辺諸国の記述的辞典』 (*A Descriptive Dictionary of the Indian Islands and Adjacent Countries*) であった。クロフォード氏はゴーストがマラッカにもたらした黄金や小麦を日本産とみなし、彼らは日本人であると推定した。<sup>(3)</sup> 一方、一八七五〜八四年に刊行された『アルブケケ実録』英訳本では、訳者のウォルター・デ・グレイ・バーチ氏 (Walter de Gray Birch) は、ゴーストとは、レキアすなわち琉球諸島の住民であると解釈している。<sup>(4)</sup>

このほかに一八八六年には、ヨハネス・ユストゥス・ライン (Johann Justus Rein) 氏が、マラッカに絹や陶磁器をもたらしたというゴーストは、実際には朝鮮人だったのではないかと説き、<sup>(5)</sup> 一八九九年にはリチャード・ステファン・ホイットニー (Richard Stephen Whitley) 氏が、ゴーストとは琉球の貿易船に同乗した日本人だと推測した。<sup>(6)</sup> さらにガブリエル・フェラン氏 (Gabriel Ferrand) は、新たにイスラム航海書から、中国の近海にあるアル・グール (Al-Ghur) という島に関する記事を紹介し、このアル・グールとは台湾を指し、ゴーストとはその住民ではないかと論じている。<sup>(7)</sup> このように十九世紀後半から、西欧のアジア学者は、ゴーストの実態を日本

人・琉球人・台湾人などとする諸説を提示したが、総じて推論の域を出るものではなかった。

これに対し、日本人の研究者が『アルプケルケ実録』にみえるゴーレスについて最初に論じたのは、一九〇〇年の高桑駒吉「欧州人渡来以前足利時代に於ける南蕃交通の形跡」であった。高桑氏はゴーレスは両刀を佩用し、金塊や小麦を輸出していることから日本人と考えられ、その本国をレキアと称したのは、日本人と琉球人を混同したか、日本人が琉球經由でマラッカに來航したためだと論じた。<sup>(8)</sup>一九〇九年には柴謙太郎氏、一九一六年には川島元次郎氏も、新たにいくつかの関連史料を紹介して、高桑説に賛同している。<sup>(9)</sup>また一九一四年には、藤田豊八氏がゴーレスとは倭人 (*wo-jen*) の転訛であり、マラッカに來航したゴーレスは日本人は、ことさらにその本国を隠して、レキアは琉球から來たと称したと推定している。<sup>(10)</sup>一方で一九一五―一八年には、内田銀藏氏がゴーレスを高麗の転訛と想定したうえで、ゴーレス問題に関する欧米や日本の先行研究を詳しく紹介した。ただしゴーレスは高麗説の具体的な考証は、内田氏の逝去により未発表に終わった。<sup>(11)</sup>

このように一九一〇年代までは、日本の研究者は内田氏を除いて、ゴーレスが両刀を帯び、金塊や小麦を輸出していることから、彼らを日本人とみなしていた。しかしこれに対し、一五二〇年代からゴーレスを琉球人とする見解を積極的に主張したのが秋山謙藏氏である。秋山氏はまず一九二八年に、琉球の家譜史料により、一五―十六世紀の琉球王国が、マラッカなどの東南アジア諸国と活発に通交していた史実をはじめて指摘し、『アルプケルケ実録』にみえるゴーレスの記述も、琉球の海外貿易や風俗習慣に関する同時代史料と一致していることを示して、ゴーレスは琉球人であったと論じたのである。<sup>(12)</sup>一九三〇年にはシャルル・アグノエル (Charles Haguenauer) 氏も、秋山説を紹介して賛意を示した。<sup>(13)</sup>

とはいえ一九三〇年代以降も、ゴーレスは日本人説を説く論者はなお少なくなかった。まずは前嶋信次氏が、

フェラン氏の紹介したイスラム史料を紹介したうえで、ゴレスとは日本人であり、その本国であるゴールとは、五島列島の転訛だと推定している<sup>(14)</sup>。また同年には岡本良知氏も、ゴレスや琉球人<sup>レキョウオス</sup>について記した多くのポルトガル史料を新たに紹介するとともに、ゴレスを日本人、ゴールを五島の転訛とする前嶋説に賛同した<sup>(15)</sup>。これに対し、やはり同年に桑田六郎氏は、ゴールを五島に比定することは音韻的に無理であり、ゴールとは高麗に由来する名称で、のちに漠然と琉球も指すようになったと論じている<sup>(16)</sup>。このほかに一九三五年には、藤田元春氏がゴレスとは薩摩半島南部の郡<sup>こおり</sup>という地名に由来するとして、ゴレスとは薩摩の坊津から来航した日本人を指すという見解を提示した<sup>(17)</sup>。

しかし一九三一年に『歴代宝案』が発見されたことにより、琉球王国がマラッカなど東南アジア諸国と活発な貿易を行っていたことが明らかになった。その一方で、日本人の東南アジア渡航の事実はまったく確認されなかったことは、ゴレス＝琉球説をいかに有利としていった。秋山謙蔵氏は『歴代宝案』のほか、前嶋氏や岡本氏が紹介したイスラム・ポルトガル史料も援用して、自説をさらに補強している<sup>(18)</sup>。小葉田淳氏も一九三五年に『歴代宝案』を活用して琉球＝マラッカ貿易の実態を解明し、ゴレスは明らかに琉球人であると論じた<sup>(19)</sup>。また岡本良知氏も、一九三六年刊の『十六世紀日欧交通史の研究』では、秋山・小葉田説によって、ゴレスはおもに琉球人であると認めたが、日本人がそこに混在していた可能性も示唆している<sup>(20)</sup>。さらに安里延氏も、一九四一年刊の『日本南方発展史』において、秋山・小葉田説を全面的に支持し、ゴレス＝琉球説を主張した<sup>(21)</sup>。

このようにゴレス論争は、琉球王国の東南アジア貿易の解明が進むとともに、ゴレス＝琉球説がしだいに優勢となっていく。ただし戦後になると、南洋史研究の拠点であった台北帝国大学が消滅し、沖縄が米軍占領下に入ったことによって、南洋史・琉球史研究自体がまったく低調になり、日本におけるゴレス論争も停頓し

てしまった。専論としては、わずかに前嶋信次氏が一九六一年に、フェラン氏の紹介したイスラム史料を再検証して、ゴールⅡ五島とした旧説を撤回し、琉球説を追認した論考があるにとどまる。<sup>(22)</sup>

なお一連のゴールレス論争において、われわれが琉球に関するポルトガル史料としてまず思い浮かべる、トメ・ピレス (Tomé Pires) の (*Suma Oriental*) は検討の対象となっていない。同書は未刊行の写本のまま長く埋もれており、一九三七年にポルトガルのアルマンド・コルテザン (Armando Cortesão) 氏が、パリ国立図書館でその写本を発見した。コルテザン氏が翌年にその東アジア関係記事を紹介し、一九四四年にその英語訳注本を刊行したことによって、ひろく知られるようになったのである。<sup>(23)</sup> しかし日本では、英訳本の刊行後にはゴールレス論争自体が下火になったこともあって、その豊富な内容はほとんど注目されなかった。同書の琉球人<sup>レキキョス</sup>関連記事が周知されるようになったのは、一九六六年に大航海時代叢書の一冊として、生田滋氏らによる訳注本が刊行されてからであった。<sup>(25)</sup>

『東方諸国記』の琉球記事は、ゴールレス論争で紹介された『アルブケルケ実録』などの史料とくらべても、より詳細かつ具体的であり、その後は琉球関係のポルトガル史料といえば、もっぱら『東方諸国記』が紹介され、他の史料はほとんど顧みられることがない。そして同書では、冒頭に「琉球人<sup>レキキョ</sup>はゴールレスと呼ばれる」と端的に記すのに対し、日本<sup>ジャンポ</sup> (Jampou) 人についてはゴールレスという呼称を用いないことから、ゴールレスⅡ琉球説はほぼ完全に定着することになった。

ただしその後も、ゴールレスという呼称が何に由来し、誰がどのようにその呼称をポルトガル人に伝えたか、といった問題については、半世紀以上にわたって議論が停滞しており、いまだに定説がない。しかし二〇〇七年にいたり、的場節子氏がこの問題について新たな解釈を提示した。的場氏は十六世紀のモルッカ(マルク)海域で

は、長剣をゴール( Golc ) と称していたことを紹介し、ゴールスとは刀剣を帯びた人々を意味しており、両刀を帯び日本刀をもたらした琉球人も、ゴールスと称されたと説いたのである。<sup>(26)</sup> ただし、場氏の新説は、『東方諸国記』などに記されたジャンポンを、日本ではなくフィリピン諸島に比定する独自の見解とも関連しており、ゴールスについても、元来はインドネシア方面の刀剣を帯びた民族を指していたとみなしている。

ゴールスという呼称の語源や伝流を考証するためには、一部の史料だけに依拠するのではなく、イスラム史料やポルトガル語史料などを、包括的に再検討することが必要であろう。ただし日本では、これまでに紹介されたゴールス問題に関わる諸史料を、総合的に検討した研究は行われていない。これに対しゲオルグ・シユールハンマー氏は、ポルトガル人の日本発見の前史として、ゴールスや琉球人<sup>レキオス</sup>に関連するポルトガル語を中心とする諸史料を時系列的に整理・紹介している。<sup>(27)</sup> しかし日本では、この論考はポルトガル語で書かれていることもあって、琉球史研究者にもほとんど参照されていないようだ。<sup>(28)</sup> このため本稿では、シユールハンマー氏の論考を参照し、そこに紹介されていない史料も追加して、ゴールスに関するポルトガル語をはじめとする諸国語史料を、できるだけ網羅的に紹介・検討し、ゴールス問題に対する再検討を試みてみたい。

## 二 アラビア語史料のアル・グール情報

ゴールやゴールスについて論及した史料としては、アフォンソ・デ・アルブケルケの書簡や、『東方諸国記』、『アルブケルケ実録』をはじめとする、ポルトガル史料が数も多く、内容も詳細かつ具体的である。ただしそれに先んじて、アラビア語の航海書にもアル・グールに関する記事があり、そのほか若干のスペイン語・イタリア

語・ラテン語史料にもゴールやゴールズについての言及がある。本節では従来の先行研究で紹介されたこれらの史料を、網羅的に翻訳・紹介することにした。

アラビア語のアル・グール関連史料は、まず一九八二年にG・フェラン氏が仏訳で紹介し<sup>(29)</sup>、一九二一―二五年にはそれらの記事を含む航海書の写真版を刊行している<sup>(30)</sup>。日本では一五三二年に前嶋信次氏が、いくつかのアル・グール関連記事をフェランの仏訳により紹介し、さらに一九六一年には、写真版によりアラビア語から訳出した<sup>(31)</sup>。さらに一九七一年には、ジェラルド・ランダル・ティベッツ (Gerald Randall Tibbets) 氏が、特に代表的なイブン・マージド (Ahmad ibn Majid al-Najdi) の航海書の英訳を刊行している<sup>(32)</sup>。ここでは前嶋氏が和訳した史料はそれを引用し、前嶋訳がない史料は、ティベッツ氏の英訳により訳出した。

#### 【史料1】イブン・マージド『海洋学精選』

イブン・マージドは、アラビア半島のオマーン沿岸の出身で、十五世紀後半にインド洋で活動した著名な航海者であり、多くの航海指南書を著した<sup>(33)</sup>。『海洋学精選』(Hawāḍiq al-khṣiṣār fī usūl ṭīm al-bihar) は、彼が一四六二  
 年以降に著した最初の著作で、インド洋を中心とした航海知識を韻文で記したものである<sup>(34)</sup>。なおイブン・マージドは、ヴァスコ・ダ・ガマ (Vasco da Gama) の最初のインド航海の際に、アフリカ東岸のマリンディからカリカットまでのパイロットであったと説かれることが多い<sup>(35)</sup>。ただしティベッツ氏によれば、ガマ艦隊の乗員による諸記録では、ガマ艦隊のパイロットをゲジャラートのムスリムと記しており、アラビア出身のイブン・マージドとは符合しない。彼は高名な航海者だったため、後世にガマ艦隊のパイロットとして仮託されたと考えられる<sup>(36)</sup>。

同書では、中国沿海の諸港について述べたなかで、次のように記している。

それらの次がジトトウーン (Zitun、泉州) であることを承知あれ。

かの人々の帝王の都はカンバリーク (Kanbalik、北京) と呼ばれている。

この地方から南にゆけば、あるものといえは危険とアル・グール (al-Ghur) だけだ<sup>37)</sup>。

これがアル・グールについて言及した、現存する最初の史料である。ここで伝えられたアル・グールは、中国の南方海上にある、人跡の及びがたい僻遠の地というイメージである。ただしこれはあまりにも漠然とした記事であり、アル・グールがはたして琉球を指すのかどうかも不確定である。この点については第五章で再考することにしたい。

【史料2】イブン・マージド『航海学の基礎に関する有益情報』

『航海学の基礎に関する有益情報』(Kitāb al-Fawā'id fi usul 'ilm al-bahr wa l-qawā'id) は、イブン・マージドが一四八八〜一四九〇年に執筆した著作であり、全十二篇からなる。インド洋からジャワ海にいたる航海技術や航路情報を、散文で集めたものであり、この時代のアラブ系航海書の代表作とされている<sup>38)</sup>。同書では、主要な島々について記した第十篇に二か所、モンズーンによる航海術について記した第十一篇に二か所、アル・グールに関する記事があらわれるが、フェラン氏や前嶋氏が訳出したのは第十篇の一か所のみである。ここではティベツ氏の英訳により、他の二か所も訳出した。

【史料2a】第十篇「諸島について」

第十編では、マージドはインド洋とその周辺における主要な十の島について説明する。それらはアラビア半島(太古は島だったと説く)、マダガスカル、スマトラ、ジャワ、アル・グール、セイロン、ザンジバル、バーレー

ン、ホルムズとキーシュ、ソコトラである。このうち五番目のアル・グールに関する記述は、次の通りである。第五の島はアル・グールとよばれる。アル・グーリー鉄の産地があり、あらゆる鉄を断つ、すばらしい切れ味の剣を産するが、ジャワの言葉では、これをリキーウー (ikiwu) と呼んでいる。その王 (sultan) は異教徒で、中国の王たちの武力と資源とにもかかわらず、これらと戦っている。その民はまことに強悍で、彼らよりもっと勇氣のある者はないであろう。その一人は、他国の一人を相手にせず、よくその一群と戦うのである。<sup>39)</sup>

この記事は、史料1にくらべてはるかに具体的になっている。特に(1)鋭利な刀剣を生産し、ジャワではリキーウーと呼ばれたこと、(2)その人民はきわめて勇敢で、中国と交戦していた、という情報が重要である。前嶋氏は当初、(1)は日本刀、(2)は倭寇の中国襲来を伝えているとして、このアル・グールは日本人であり、グール(ゴール)とは五島の転訛とみなしたが、のちには琉球説に同意した。(1)については、琉球人が東南アジアに輸出した日本刀が、琉球産と誤認されたと考えられ、リキーウーとはむしろ琉球を意味している。(2)については、さしあたり十五世紀前半の前期倭寇の活動が、琉球人と混同されて伝えられたと考えておきたい。

【史料2b】第十篇「諸島について」(続)

第十編の末尾で、イブン・マージドはそこで論述した主要諸島について、次のように総括している。

概括すれば、諸島のなかでもっとも繁栄しているのは、五つの島々である。それはバーレーン、ジャルーン、アンダルシア、アル・グール、セイロンである。しかしホルムズ沿岸のジャルーンがもっとも繁栄しており、イラクの人々の港であるため、商売の規模も最大である。……バーレーン、セイロン、アル・グールについては、それらの文明は前述した通りである。<sup>40)</sup>

ここではアル・グールが、パーレーン・ホルムズ・セイロンなどのインド洋交易の拠点や、イスラム圏西端のアンダルシア（むろん島ではないが）とともに、もつとも繁栄した島々のなかに数えられている。十五世紀末には、ムスリム海商はマラッカなどにおいてしばしば琉球人と接触したはずであり、琉球人の活発な貿易活動が、こうしたイメージを生み出したのだろう。

【史料2c】 第十一篇「モンソンと関連諸事項」

第十一篇では、イブン・マージドはインド洋とその周辺のモンソンと、それを利用した航路や航海シーズンについて、地域別に詳細な説明を加えている。そのうちアル・グールに関する言及は、「インド東部からアフリカへの往復」の項目にあらわれる。

すべての南方気候帯の人々は、ダブル（Dabur）の終わりに航海しようとすれば、赤道までは降雨に耐えねばならないが、そうすればモンソンに対応できる。ソファアラ（モザンビーク北部）や、河口地域（ザンベジ川河口を指す）から、ザンジュ（Zanj、ザンジバル）沿岸に向かい、またティモールからジャワや近隣地方へ向かい、さらにモルッカ、アル・グール、ジャワ、およびあらゆる南方諸島から出帆する人々も同様である。彼らはダーマーニー（Damani）が終わったときだけに航海することができる。<sup>(4)</sup>

インド洋では四月から八月まで南西モンソンが強く吹く。この時期は西から東への航海シーズンであり、四月〜五月末までをダブル（Rih al-Dabur）、八月末〜九月上旬をダーマーニー（Rih al-Damani）と称する。ダブルの後は雨期に入り、航海は難しくなる。一方、ダーマーニーが終わった九月下旬からは、北東モンソンが安定して吹き、東から西への航海シーズンになる。<sup>(5)</sup> ティモールからジャワへの航海もその一つである。一方、モルッカ、アル・グール、ジャワを出帆する船の目的地は示されていないが、おそらく西方のマラッカ方面だろ

う。アル・グールはモルッカやジャワとともに、アジア海域の東方になって、秋期の北東モンスーンで来航する地域として認識されていたわけである。

【史料3】スライマーン・アル・マフリー『海洋学の精密なる知識におけるマフラの支柱』

十五世紀後半のイブン・マージドにつづく、十六世紀初頭を代表する航海書の作者が、スライマーン・アル・マフリー (Sulayman al-Mahri) である。彼はアラビア半島南岸のマフラに出自する航海者であり、一五二一年にこの『海洋学の精密なる知識におけるマフラの支柱』(‘*Umdat al-Mahriyya fi dabi al-‘ilm al-bahriyya*) を完成した。<sup>(43)</sup> 同書も散文により、インド洋からジャワ海にいたる航海技術の実践的知識を集成しており、イブン・マージドは言及しなかったいくつかの新航路も記されている。

同書ではジャワ島からモルッカ諸島のジロロ島までの航路を述べた部分に続いて、次のような記述がある。

ファリユーク (Fariyuk) またはフィリユーク (Firyuk) の島は、同じように大きく、住民がおり、中国の諸港の東南に位置する。つぎにアル・グールの島がくる、それは住民のある大島で、中国の上にあつて、その南方にあたつている。またその王は中国の民と戦っている。そこはアル・グーリー鉄の産地である。<sup>(44)</sup>

アル・グールを中国の上にあるというのは、アラブ系の地図では南方を上としたためである。アル・グールの説明はマージドの記事(史料2a)を簡略にしたものであるが、中国の東南にあるというファリユーク／フィリユークの記事が追加されている。この島については、位置的には日本に相当すると思われるが、明確ではない。なおこの記事は、オスマン帝国の海軍提督であったアリー・チェレビー (Sidi Ali Çelebi) が、彼の艦隊がポルトガル艦隊に攻撃され、一五四四年にグジャラートに漂着した際に執筆した、トルコ語の航海書『大洋』(‘*Ma*

*Muhit*)にも、ほぼ同文のまま収録されている。<sup>(45)</sup>

【史料4】スライマーン・アル・マフリー『海の知識に関する優良なる指針』

『海の知識に関する優良なる指針』(*Minhaj al-Jakhir fi 'ilm al-bahir al-sakhir*)は、前述の『マフラの支柱』に補訂を加えて成立した航海書である。<sup>(46)</sup>そこではアル・グールについて、次のような記事がある。

ファリユークまたはフィリユークの島も、大きな島々の一つに数えられる。それは中国の諸港の東南に位置する。有名な島々のなかにはリキユーの島 (*Jazirat Likyūn*) があるが、これは一般にアル・グールという名で知られている。<sup>(47)</sup>

この記事は簡略であるが、アラビア史料としてははじめて、アル・グールがリキユー（琉球）とも呼ばれていることを記している点で重要である。すでにマジドも、ジャワ人がアル・グールのもたらす刀剣をリキユーとよぶことを記していたが（史料2a）、ここではリキユー＝琉球が島名であることが明示されたのである。

このようにアラブ人航海者には、十五世紀後半からアル・グールに関する簡単な情報が知られていた。まず十五世紀後半のイブン・マージドによれば、アル・グールとは、次のような国であった。①中国の南方海上に位置する島である。②アル・グーリー鉄と、ジャワ人がリキユーと呼ぶ鋭利な刀を産する。③その王は異教徒で、住民は勇敢であり、中国人と交戦している。④世界中でも繁栄した島々の一つである。⑤夏季の南西モンsoon（ダーマニー）が終わったあとで、西方へと航海する。さらに十六世紀初頭のスライマーン・アル・マフリーは、次の情報をつけくわえた。⑥アル・グールの近く、中国の東南海上にファリユークという大島がある。⑦ア

ル・グールは一般にリキューとも呼ばれる。

このうち②は、琉球人がもたらした日本刀を、琉球産品と誤解したのだろう。③は、前期倭寇の活動を琉球と混同したのだと思われる。④は、十五世紀中後期における、琉球王国による東南アジア貿易の全盛期の状況を反映しているのだろう。また⑤のように、琉球船が夏季の南西モンスーンが終わった旧暦八〜九月ごろに出帆し、マラッカ方面に渡航したことは、『歴代宝案』<sup>(48)</sup>からも確認できる。総じてアラビア語史料におけるアル・グールII琉球記事は、若干の混同を含みながらも、漠然と琉球王国の東南アジア貿易の状況を伝えたものといえる。おそらくマラッカなどで実際に琉球人と接したイスラム海商がもたらした情報により、こうした内容が記されたのだろう。

### 三 マラッカ占領前後、ポルトガル史料のゴレス情報

一五四八年にヴァスコ・ダ・ガマがカリカットに到達してから、ポルトガルは砲艦の威力を背景として、強引にインド貿易に参入した。一五〇五年にはフランシスコ・デ・アルメイダ (Francisco de Almeida) が初代のインディア副王となり、一五〇九年にはアルブケルケが第二代副王に就任した。アルブケルケは翌年にはゴアを占領し、本拠をコチンからゴアに移した。そしてあたかもスライマーン・アル・マフリーが『海洋学の精密なる知識におけるマフラの支柱』を著した一五一一年に、アルブケルケはマラッカを占領し、ジャワ海域・南シナ海域への進出拠点としたのである。さらに一五一五年には、アルブケルケはホルムズを服属させ要塞を建設した。こうしてゴアを中心とし、インド洋からジャワ海・南シナ海にいたる航路の結節点であるマラッカと、インド洋から

バルシア湾・イラクを経て地中海にいたる航路を扼するホルムズを、東西の拠点として、沿岸各地の商館や要塞とそれらを結ぶ航路を統括する、ポルトガル領インディア (Estado da Índia) が形成されたのである。<sup>(49)</sup>

ポルトガル人がはじめてゴース (Goës) について伝えたのは、マラッカ占領の前年、一五一〇年のことであつた。その後は一五一〇年代を中心に、おもにアルブケルケやその関係者の書簡に、ゴースに関するさまざまな記述が残されている。ここではそれらのゴース情報を、時系列に沿って紹介することにした。なお翻訳については、岩波書店の『大航海時代叢書』の本文または補注に訳文がある場合は、ポルトガル語原文と対照したうえでそれらを引用した。ただし漢字表記や文章表現については、原訳文の文意に影響がない範囲で適宜改めた部分がある。その他のポルトガル語史料や南欧史料については、ポルトガル語の原文から訳出したが、英訳がある場合はそれを参照した。<sup>(50)</sup>

【史料5】 ルイ・デ・アラウジョのアルブケルケ宛書簡 (一五一〇年二月六日)

一五〇九年九月、ディオゴ・ロベス・デ・セケイラ (Diogo Lopes de Sequeira) の率いるポルトガル艦隊が、はじめてマラッカに入港し、当地に商館を設立して帰航した。しかしその後、マラッカ王はポルトガル人の野心を警戒して、商館に残ったルイ・デ・アラウジョ (Rui de Araújo) などのポルトガル人たちを監禁してしまつた。<sup>(51)</sup> アラウジョは一五一〇年九月六日付で、彼らがマラッカで得た情報を記した書簡を、ひそかにアルブケルケに送つた。そのなかにはマラッカに來航したゴースに関する、次のような情報も含まれている。

当地には約四千人の兵士しかないようです。……戦うことのできる人々の武器は槍、ゴースから手に入る少数の剣、および当地で作られる剣、弓、(吹矢の) 筒です……。

ゴレスは一月に来て四月に自分たちの国にむけて出発します。そこまでは途中四十日を要し、来航するのにも四〇日前後を要します。彼らは商品として緞子、麝香、黄金で飾った箱、劍、短劍、銅、小麦、砂金を持ってきます。彼らは当地から胡椒、若干の——といつてもごく少量の丁子を持ち帰ります。……

マラッカの周辺には二つの金鉱があります。これらの金鉱とゴレスの国からは、当地に毎年九ないし十バールの黄金が運ばれてくるということです。<sup>(註)</sup>

ここではゴレスのマラッカにおける貿易活動を、かなり具体的に記述している。アラウジョがマラッカにおいて交易を行った際に得た、実際の知見に基づいているのである。輸出・輸入品ともに、その後の史料に記される品目とほぼ一致している。そのなかでも、日本からの再輸出品であった、日本刀と黄金がマラッカにとって特に重要な商品であった。

【史料6】アフォンソ・デ・アルブケルケのマヌエル一世宛書簡（一五二二年四月一日）

一五二二年四月、アフォンソ・デ・アルブケルケは十八隻の艦隊を率いてゴアを出航し、七月一日にはマラッカに到達した。七月二十四日には艦隊は攻撃を開始し、八月八日にはマラッカを完全に占領した。アルブケルケはそれから五か月のあいだにマラッカを要塞化して支配体制をととのえ、十二月にはマラッカを出航し、一五二二年初頭にコチンに帰航した。<sup>(註)</sup> アルブケルケは翌年四月に、コチンから国王マヌエル一世 (Manuel I、在位一四九五―一四二一年) に長文の書簡を送り、マラッカ征服の経過を報告した。その末尾で、彼はジャワ人パイロットから入手した海図について、次のように述べている。

また陛下に、あるジャワ人パイロットから入手した大地図から写した、見本となる一部分をお送りしま

す。そこでは喜望峰からポルトガル、ブラジルの領域、紅海とペルシア湾、香料諸島までが含まれます。また中国人 (China) やゴールスの航海、彼らの船が向かう諸国までの航路や直線ルート、また内陸でどの諸国がお互いに境を接しているかも記しています。……私は陛下に、フランシスコ・ロドリゲス (Francisco Rodrigues) が別に写した一部分 (の送付) も命じました。陛下はそれで、中国人やゴールスがどこから来るか……などを如実に知ることができましょう。<sup>(54)</sup>

ここで述べる、フランシスコ・ロドリゲスが写したジャワ人パイロットの航海図は、トメ・ピレス『東方諸国記』の写本と合綴されて、パリ国立図書館に所蔵されていた。これはロドリゲス自身が監督して作製させた写本と思われる。一九三七年にこれを発見したアルマンド・コルテザンは、一九四四年に両者を英訳して刊行し、一九七八年にはポルトガル語の原文版も刊行している。<sup>(55)</sup> この地図については稿をあらためて検討したいが、アルブケルケがマラッカ以东の貿易圏への進出をはかり、ジャワ海域だけではなく、南シナ海域における華人や琉球人 (ゴールス) の航路情報にも関心を示していたことがわかる。

【史料7】マヌエル一世の教皇レオ十世宛書簡 (二五二三年六月六日)

アルブケルケからマラッカ征服の報告を受けた国王マヌエル一世は、翌年六月にカトリック世界の頂点にあるローマ教皇レオ十世 (Leo X、在位一五二一〜一五二三年) に書簡を送り、そのニュースを報告した。そこではマラッカ征服後の状況について、次のような一節がある。

マラッカには、スマトラ、ペグー、ジャワ、ゴールス、そして中国にいたる極東からも、外国商人が訪れております。……彼らはアルフォンソ (・デ・アルブケルケ) から自由に交易することを許され、その住居を

要塞の近くに移し、ポルトガルに服従しその貨幣を使うことを約束しました。<sup>(86)</sup>

実際には琉球人は、一五一一年にアルブケルケがマラッカを占拠した直後に入港したものの、その後はマラッカに來航することはなくなっていた。<sup>(87)</sup>ともあれここでは、ゴージェスがマラッカに來航する代表的な外国商人の一人に数えられていることが注目される。

【史料8】アフォンソ・デ・アルブケルケのマヌエル一世宛書簡（一五二三年十一月三十日）

アルブケルケは一五二二年二月にマラッカからコチンに帰還してからは、ゴアを拠点としてアデンの攻撃やホルムズの要塞化など、アラビア湾方面での勢力拡大に傾注し、ふたたびマラッカに來航することはなかった。<sup>(88)</sup>ただし一五二三年十一月にカナノールから国王に送った書簡では、マラッカ方面の状況に関して次のように報告している。

インディアのあらゆる王は、マラッカでのわれわれの行動に驚き、われわれに服従しています。……アントニオ・デ・アブレウ（António de Abreu）の語るところによると、その他の島々はおとなしく、みな陛下に服従しているということです。華人は陛下に奉仕する人々で、またわれわれの友人です。ゴージェスもわれわれのことを知っていますので、同様になるでしょう。<sup>(89)</sup>

アントニオ・デ・アブレウは、一五一一―一五二二年にバンダ諸島に到達した艦隊の司令官である。<sup>(90)</sup>アルブケルケは国王に対し、ジャワ海方面の島々のほか、華人とゴージェスも、ポルトガルに従い友好関係を結んだと報告しているわけである。ただし実際には、華人はポルトガルのマラッカ占領後も、その支配下で貿易を続けたが、琉球人の來航は途絶したことは前述の通りである。

【史料9】『大アフォンソ・デ・アルブケルケ実録』第三部第十八章

アルブケルケの事績に関する代表的な編纂史料としては、アフォンソの庶子であるブラス・デ・アルブケルケ (Braz de Albuquerque) が編纂した、『大アフォンソ・デ・アルブケルケ実録』(Commentarios do grande Afonso Dalboquerque) がある。ブラスは父の残した書簡などを活用して、一五五七年に本書の原稿を完成し、一五七六年にリスボンにおいて刊行した<sup>(61)</sup>。本書はマラッカ占領から半世紀近くあとに編纂された文献ではあるが、その内容は同時代史料にもとづいており信頼性が高く、ポルトガルのアジア進出に関する基本史料の一つとされている。本書の第三部第十八章では、マラッカの風俗習慣や統治体制について述べているが、そのなかには当地に來航したゴースに関する、かなり詳しい記述も含まれている。

【史料9a】『アルブケルケ実録』第三部第十八章(一)

マラッカはまことに良港であり、嵐にも襲われず船が難破することもない。あるモンズーンがはじまり、他のモンズーンが終わると、西方の人々としてはインド人が、東方の人々としてはジャワ人・華人・ゴース、およびあらゆる島々の人々が、マラッカにやってくる。……東から西に向かう船は、マラッカで西方の商品を見いだして、それらを持ちかえり、彼らが運んできたものを置いていく。西から来た船も同じだけの交易をする。……マラッカには毎年、(西からは)カンバヤ・シャウル・ダブル・カリカット・アデン・メッカ・シフル・ジッタ・コロマンデル・ベンガルの船が來航する。(東からは)華人・ゴース・ジャワ・ペグーや、すべてのそちらの地方の船が來航する。シャムの船はマラッカには商品を積んで來航しない。というのは、つねにマレー人と交戦しているからである<sup>(62)</sup>。

アルブケルケがマラッカを攻撃する前夜の、マラッカにおける貿易活動を概観した記事である。ここではマ

ラッカに來航する諸国の船を列挙しているが、ゴールスは華人・ジャワ・ペグーとともに、東方から來航する貿易船の代表とされている。

【史料9b】『アルブケルケ実録』第三部第十八章(二)

マレー人は尊大な人々であり、短剣<sup>クリス</sup>で人を巧みに殺すことをたいへん誇りにする。彼らは狡猾で、総じて信用がおけない。しかし、ゴールスはつねに接しやすく、このためだれもが彼らと取引することを大いに名譽とする。彼らは上品で、物慣れた人々だからである。<sup>(63)</sup>

史料9aにつづいて、マレー人と琉球人の性格を比較している。琉球人(ゴールス/レキオス)が好ましい人柄の、信頼しうる商人であるということは、多くの十六世紀初頭のポルトガル史料に共通する記述である。

【史料9c】『アルブケルケ実録』第三部第十八章(三)

ゴールスは、アフォンソ・デ・アルブケルケがマラッカを占領した時の情報によると、——現在ではより確実なことが知られているが——、当時は彼らの国は大陸にあるといわれていたが、一般の意見では彼らの国は島で、同地からマラッカに航海してくるということである。当地には毎年二・三隻の船がやつてくる。彼らの携えてくる商品は、生糸・絹織物・浮織布<sup>フロイト</sup>・陶磁器・多量の小麦・銅・明礬・砂金である。彼らはまた煉瓦の形をした黄金を携えてくるが、それには国王の印が打つてある。……この黄金は彼らの国の近くに ある島で産する。そこはペリオコ(Pericoo)と呼ばれ、黄金を豊富に産する。このゴールスの国はレケア(Laquea)と呼ばれる。<sup>(64)</sup>

この一節がゴールス論争の発端となった記事である。ここでは前半部分だけを引用した。後半ではゴールスが色白で外套状の衣服を着用し、長剣と短剣を佩用していること、商品を少しずつ荷揚げし、つねに真実を話し、

取引がおわれればすぐに帰国することなどが記されている。ペリオコとは、スライマーン・アル・マフリー（史料4）が伝えるフェアユーク（Faryukh）と同じだと考えられている。ペリオコ＝フェアユークは、琉球の近くで金の産地であることから、日本ではないかと思われるが明確ではない。

またこの記事では、ゴースの本国をレケア＝琉球と記している。ただしこの語が、本書の素材となったフォンソ自身の書簡や記録にあったのか、編著者のブラスが、すでに一般化していたレケアという国名を追記したのかは不明である。なお『アルブケルケ実録』では、ここで紹介した第三部第十八章以外にも、琉球人に関する記事が散見するが、そこでももっぱらゴースという呼称が用いられている。<sup>(66)</sup>

以上が、アルブケルケのマラッカ占領の前後、一五一〇～一三三年に記されたゴース関係の記録と、この時期の書簡や記録に基づくと思われる、『アルブケルケ実録』のゴース関係記事である。ここで描かれたゴースは、①毎年冬季にマラッカに來航し（史料5・史料9c）、②刀剣や黄金をはじめ、絹織物や同時期などの中国産品や、小麦や銅などをもたらし、胡椒などを持ちかえった（史料5・史料9c）。③ゴースは華人やジャワ人とともに、東方から來航する代表的な商人とされ、信賴しうる民族とみなされていた（史料9a・9b）。④アルブケルケはマヌエル一世に、ゴースにいたる航路図を献上し、彼らがポルトガルに従ったと伝え（史料6・8）、⑤マヌエル一世はそれをさらに教皇に報告した（史料7）。このうち①・②の内容は、『歴代宝案』などに記された、琉球史料の記述とも一致している。

史料5～史料8で示したように、アルブケルケのマラッカ占領の前後、一五一〇年～一五二三年の書簡では、アルブケルケ本人も含め、もっぱら琉球人をゴースと称し、レキオスという名称は用いられていない。また

一五五七年に成立した『アルブケルケ実録』でも、基本的に琉球人はゴーレスと呼ばれ、レケオという呼称は、史料9cの1か所に現れるにすぎない。ただし十六世紀中期には、すでに一般的には琉球人をゴーレスと呼ぶことはほとんどなく、もっぱらレキオス（レケオス）という呼称が用いられていた。『アルブケルケ実録』が依然としてゴーレスという呼称を用いるのは、それがマラッカ占領前後の原史料に基づいて編纂されたための例外にすぎない。

#### 四 ゴーレスからレキオスへ

アフオンソ・デ・アルブケルケが一五二二年初頭にインドに帰航してからも、彼の後継者によって、マラッカ以東におけるポルトガルの貿易活動は順調に拡大していった。ジャワ海方面では、ポルトガル船は一五二二年にバンダ諸島に、一五二三年にはモルッカ諸島に達した。また南シナ海方面でも、一五二三年にはポルトガル人が華人ジャンクに同乗して中国に達した。<sup>(67)</sup>このころから、琉球人についてはゴーレスに代わって、レキオス（レケオス）という呼称が一般的に用いられるようになっていく。

【史料10】 ルイ・デ・ブリトのアフォンソ・デ・アルブケルケ宛書簡（一五二四年一月六日）

この商館には大量の明礬と銅があります。これらは当地では消費されない商品です。銅はレキオス(Lequios)から、明礬はパン(Pão)、マレー半島東岸のパハン(カピタン)からもたらされます。<sup>(68)</sup>

ルイ・デ・ブリト(Ruy de Brito)はマラッカの司令官であり、これはゴアのアルブケルケに対する、マラッ

カ商館の貿易事情に関する報告の一節である。これがポルトガル史料において、ゴースではなくレキオスという名称が使用された初例である。一五二四年以降は、このようなポルトガル領インディアで記された書簡では、琉球人はもっぱらレキオス（レケオス）と記され、ゴースという呼称は使われていない。

また一五二六年成立の『ドウアルテ・バルボザの書』（*O Livro de Duarte Barbosa*）、一五五二年以降に刊行された、ジョアン・デ・バロス（João de Barros）の『アジア史』（*Da Asia*）、一五五〇年以降に成立した、ガスパル・コレア（Gaspar Correa）の『インディア伝承集』（*Lendas da Índia*）などの、代表的な編年史や地理書でも、いずれも琉球／琉球人については、レキオ／レキオス系の呼称が用いられている<sup>(69)</sup>。一五五七年成立の『アルブケケ実録』において、ほとんどゴースが用いられているのは、前述のようにマラッカ占領当初の原史料に依拠したための例外である。

【史料11】トメ・ピレス『東方諸国記』第四部「シナからボルネオにいたる諸国」

レケオス（lequeos）はゴース（gueses）と呼ばれる。彼らはこの名前のどちらかで知られているが、レキオス（lequios）というのが主な名前である。国王とすべての人民は異教徒である。国王は中国の臣下で、朝貢を行っている。……彼らは中国に渡航して、マラッカから中国へ来た商品を持ち帰る。彼らはジャンポン（Jampou）に赴く。それは海路七、八日の行程のところにある島である。彼らはそこでこの島にある黄金と銅を商品と交換に買い入れる。……<sup>(70)</sup>

琉球に関する代表的なポルトガル史料として周知の記事である。ここでは前半の主要部分だけを引用した。トメ・ピレス（Tomé Pires）はリスボンの薬種商で、一五二一年ごろにインドに赴き、翌年にはアルブケケの推

挙でマラッカの商館員として貿易に従事した。一五一七年にはポルトガルの最初の使節として明朝に渡航したが、通交渉は成功せず、一五二一年からは広州で監禁され、そこで死去したようである。<sup>①</sup>

『東方諸国記』は正式には『紅海から中国までの東洋全書』(Suma Oriental que Trata do Maar Roxo ate os Chins)という。その第三部・第四部は、ピレスがマラッカ滞在中の一五一四～一五一五年に、商館員として知りえた現地情報にもとづいて記述されている。<sup>②</sup>ピレスがこの部分を執筆したのは、ちょうどゴールレスに代わってレキオス(レケオス)が用いられた時期である。ほぼ同時期に執筆されたスライマーン・アル・マフリーの著作にも、リキューの島とはアル・グールを指しているという記述があり(史料4)、このころからポルトガルやムスリムの航海者に、ゴールレス・レキオスという認識が共有されるようになったようである。

ただし一五一四年以降にも、イタリア・スペイン系の史料では、ゴールレスとレキオス(レケオス)を、異なる人々を指す用語として併用している例もある。以下、そのような用例を検討してみよう。

【史料12】 ジョヴァンニ・ダ・エムボリのレオナルド・ダ・エムボリ宛書簡(一五一四年七月十二日)

(インドシナ半島の)海岸を北に向かうと、そこにはシニ(Cini、華人)の国があります。彼らはシニとか、

レチ(Techi)とか、ゴリ(Ghor)とか呼ばれています。それは(ヨーロッパにおいて)フランドル人とか、ドイツ人とか、ブラバント人とか呼ぶのと同じことです。<sup>③</sup>

ジョヴァンニ・ダ・エムボリ(Giovanni da Empoli)はフィレンツェ出身のイタリア人である。一五〇三年にアフォンソ・デ・アルブケルケの艦隊に同乗してインドに渡航し、一五一〇年にもリスボンのイタリア人商会の貿易船でインドに渡った。一五二一年にはアルブケルケのマラッカ征服に従軍し、翌年にもマラッカに渡航して

いる。一五一四年にはインドからリスボンに帰航したが、その途中で父親のレオナルド・ダ・エムポリ (Lionardo da Empoli) に、アジアでの見聞を詳細に記した書簡を送った。<sup>(74)</sup> これはその一節である。

イタリヤ語の *Lechi* はレチオ (Lechio) の複数形で、ポルトガル語のレキオスにあたり、Ghori は Ghor の複数形で、ポルトガル語のゴースにあたる。またフランドル・ブラバントはいずれも神聖ローマ帝国の一部で、ネーデルランドのオランダ語圏に属する。エンポリはシニ (華人) ・レチ (琉球人) ・ゴリ (ゴース) を、いずれもシニの国 (中国) に包摂される諸民族のようにとらえているのであろう。彼の知見は、アルブケルケの麾下でマラッカに赴いたときに得たものだと思われるが、同時代のポルトガル語史料には、このような認識は見られない。

【史料13】マゼラン艦隊のジェノヴァ人航海士手記

一五一九〜一五二二年にかけて、フェルナン・デ・マガリヤンイス (Fernão de Magalhães、英語名フェルナンド・マゼラン) の率いる艦隊が、著名な世界一周航海をなしとげた。この艦隊の乗組員による記録のなかには、フィリピン諸島で伝聞した、ゴースないしレキオスに関する消息を記すものがある。<sup>(75)</sup> その一つが、マゼラン艦隊の旗艦であったトリニダード号のジェノヴァ人航海士 (おそらくレオン・パンカルド Leone Pancaldo) の手記である。この手記には、一五二二年三月に、マゼラン艦隊がフィリピン中東部のフムヌ (Humunu) 島に寄航した際の記事として、次のような一節がある。

彼らはまもなくその島の近くの、ずっと小さな別の島 (フムヌ島) に渡航した。そこは北緯十度にあり、若干の黄金を見つけたので、吉兆の島と名づけた。この島に停泊中、二隻の小船が、鶏とココ椰子を持ってやっ

てきて、かつて彼らと同じような別の人々を見たことがあると話した。そのため彼らは、それはレキオスカ、<sup>(26)</sup> ゴーロス (Gorosos) —— その名を持つ人々の国である——、あるいは華人 (Chins) であろうと推測した。<sup>(26)</sup> ここではジョヴァンニ・ダ・エンポリと同じく、レキオスカとゴーロス (ゴージェス) を、いずれも南欧人とは似ているが、異なる民族であると伝えている。またゴーロスについては、国名であるとともに民族名でもあるとみなしている。

#### 【史料14】マゼラン艦隊のヒネス・デ・マフラの手記

ヒネス・デ・マフラ (Gines de Mafra) もトリニダード号の船員で、一五二二年にトリニダード号がモルッカ諸島でポルトガルに投降した際に捕虜になり、一五二六年にリスボンに送致された。翌年にはスペインに送還され、航海の経過をスペイン国王カルロス一世に報告した。<sup>(27)</sup> この記事はその報告の一節である。

陛下にわれわれと同じように色白な、新たに知りえた人々についてお知らせします。その人々はレキオスカとゴーロス (Goros) と呼ばれ、それらはかなり大きな二つの国です。…… (ルソン島以下、フィリピンの島々を列挙し) …… それらの島々には、華人 (Chinas) やレキオスカやゴーロスが交易に来ます。またコーチシナ・シヤム王国・パハン王国・パタニ王国や、最大の島であるブルネイ王国、パラワン島の人々もやってきます。<sup>(28)</sup>

この記事もマゼラン艦隊が一五二二年にフィリピン諸島の各地に来航した際の伝聞である。史料13と同じく、レキオスカとゴーロスは、異なる国民と認識されている。ただしマゼラン艦隊はフィリピン中南部からモルッカに南下し、華人や琉球人がおもに来航したフィリピン北部には寄航していないので、彼らが実際に琉球人に遭遇し

たわけではなく、あくまで伝聞による情報であろう。

【史料15】ダミアン・デ・ゴイス『マヌエル王年代記』第二十四章

ダミアン・デ・ゴイス (Damião de Góis) はポルトガル宮廷に仕えた年代記作者で、一五五八〜七二年にかけて、マヌエル一世時代の編年史である『マヌエル王年代記』(Cronica do Felicissimo Rei D. Manuel) を著した。同書の第二十四章には、一五一七〜一八八年にかけて、フェルナン・ペレス・デ・アンドラーデ (Fernão Peres de Andrade) の船隊が、明朝への使節となったトメ・ピレスとともに中国に渡航し、広州湾の屯門(タマオ)に停泊していた時の状況について、次のような一節がある。

(アンドラーデは) そこに十四か月留まっていた。それは商売や諸地方、その王の権力や高官たちについてよく知るまで、当地に留まるようにという、マヌエル王の指令を受けたためであった。その間に、そこにはレケオスやゴロス (guoros)、およびジャパンゴス (japangos) の多くのジャンクが来航した。彼らもまたらした主要な商品は、大量の金であった。<sup>(29)</sup>

この記事ではポルトガル史料としては例外的に、レキオスとゴロス(ゴース)を異なる人々として記している。ただし本書は実際のできことから約半世紀後に、リスボンにおいて編纂された二次的史料であり、レキオスやゴースの情報を正確に認識していたとは思われない。また十六世紀初頭の段階で、琉球人(レキオス/ゴース)はともかく、広州湾に日本人(ジャポンゴス)が来航していたというのも信じがたい。

前節で検討したように、一五一三年以前のポルトガル史料では、琉球人はもっぱらゴースと呼ばれていた。しかし、①一五一四年以降は、ポルトガルの同時代的な書簡や記録では、琉球/琉球人は一転してレキオ

／レキオス系の呼称で記されるようになる（史料10）。②一五一四年ごろに執筆された『東方諸国記』も、レキオ／レキオス系の呼称を用い、ゴールスはその通称として一か所で言及されるだけである（史料11）。③一方、一五一一～一二年にマラッカに滞在したイタリア人エムポリは、レチ（レキオス）とゴリ（ゴールス）は異なる民族であると記しており（史料12）、④一五二一～二二年にフィリピン諸島に渡航したマゼラン艦隊の乗員も、レキオスとゴロス（ゴールス）を別個の民族とみなしている（史料13・14）。ポルトガル史料でも、後世の編纂史料には、例外的に同様の見解を記すものもある（史料15）。要するに、ポルトガル史料の同時代史料では、一五一四年以降、琉球人に対する呼称は、ゴールスはほぼ完全にレキオスに代わったのに対し、イタリア・スペイン系の史料では、ゴールスとレキオスを異なる人々とする認識も伝わっていたわけである。

## 五 ゴールスという呼称の由来とその語源

本稿ではゴールス論争に関連する史料を、おおむね時系列に沿って、できるだけ網羅的に紹介・検討してきた。まず第二節では、十五世紀後半～十六世紀初頭のアラビア語航海書に記された、アル・グールに関する記事を紹介した。ついで第三章では、一五一一年のマラッカ占領前後のポルトガル史料から、ゴールス関連記事を提示した。そして第四節では、一五一四年以降のポルトガル史料や、イタリア・スペイン史料から、おもにゴールスとレキオスを併記する記事に検討を加えた。

まずアラビア語史料では、アル・グールという用語は、十五世紀中期のイブン・マージドの著作（史料1）から、十六世紀初期のスライマン・アル・マフリーの著作（史料3・4）まで、かなり長期間にわたって使用され

たことが確認できる。十六世紀中期のアリー・チェレビーのトルコ語航海書も入れれば、イスラム圏の航海書では、少なくとも一世紀にわたり、琉球／琉球人をアル・グールと称していたことになる。これに対し、琉球の対音であるリキーウという呼称は、まず十五世紀末のイブン・マージドの著作で、ジャワ語で琉球人がもたらす刀剣の名称として言及され（史料2a）、ポルトガルのマラッカ占領以降のスライマンの著作で、ようやくリキユーがアル・グールの別称として記録されたのである（史料4）。

これに対し、ポルトガル語の同時代的な書簡で、ゴレスという名称が用いられたのはきわめて短期間であった。それは一五一〇年のルイ・デ・アラウジョの書簡（史料5）から、一五一三年のアフォンソ・デ・アルブケルケの書簡（史料8）にいたる四年間ほどにすぎない。一五一四年以降は、ポルトガルの同時代史料では、琉球／琉球人はもっぱらレキオ／レキオス系の名称で記され、ゴレスという呼称は、一五一〇年代初頭の原史料にもとづく『アルブケルケ実録』（史料9）をのぞけば、『東方諸国記』がレキオスの異称として言及する程度にすぎない（史料11）。一方、イタリア・スペイン系の史料のなかには、レキオスとゴレスを、異なる人々の名称として認識するものもあった（史料12-14）。

このようなゴレスの用例の傾向から推測できるのは、ゴレスとはおもにマラッカ以东のインド洋方面で、アラブ人などのムスリム航海者を中心に用いられた呼称ではないか、ということである。イブン・マージドが十五世紀末に著した、『航海学の基礎に関する有益情報』では、倭寇情報などとの混同も含みながらも、中国近海の交易国家としてのアル・グール像が、あるていど具体的に記述されている（史料2）。イブン・マージドの著作は、当時のイスラム圏における代表的な航海書であり、そこに記されたような情報は、インド洋を中心に交易活動をくりひろげていた、アラブ人などのムスリム航海者にひろく共有されていたはずである。

イブン・マージド自身が、ヴァスコ・ダ・ガマのインド洋横断における航海士であったというのは仮託であるとしても、この航海において、グジャラートのムスリム航海士が水先案内にあたったことは確かである。その後もポルトガル人がインド洋海域の海上貿易に進出する過程で、ムスリム海商やその背後にあるイスラム諸国家とはげしく対決しながらも、航海技術や航路情報については、ムスリム航海者の知識と経験に依存することが多かった。そして彼らから、海域アジアの東の果てにある交易民族としてのゴーレスについても、聞き知っていた可能性は高い。一五〇三年からインド洋海域で活動していたアフォンソ・デ・アルブケルケも、ムスリム航海者からゴーレス情報を得ていたであろう。そして一五一〇年に彼がマラッカに派遣したルイ・デ・アラウジヨ、および一五一一年にマラッカを占領したアルブケルケ自身は、現地でそこに来航した琉球人について具体的な情報を得て、彼らをかねてから知っていたゴーレスという呼称で記したのではないか。

しかしポルトガル人がこのゴーレスという呼称を用いたのは、マラッカ占領の前後四年間ほどにすぎなかった。一五一四年には、マラッカ長官のルイ・デ・ブリトは琉球人をゴーレスではなくレキオスと呼び（史料10）、マラッカ商館員であったトメ・ピレスも、琉球人を基本的にレキオスと称している。その後は後世の編纂史料の例外的な用例をのぞいて、ポルトガル史料には、もっぱらレキオス系の呼称が用いられた。一方、一五一一〜一五二一年にマラッカにいたジョヴァンニ・ダ・エムポリは、レキオスとゴーレスは異なる人々であるという認識をヨーロッパに伝え（史料12）、こうした認識が、イタリア人航海者が多く乗りこんだ、マゼラン艦隊にも影響をあたえたのではないかと思われる（史料13・14）。

一五一四年以降、ポルトガルの同時代史料ではゴーレスという呼称が使われなくなり、ほぼレキオ／レキオス系の呼称に統一されたことは、東南アジア島嶼部のマレー語圏では、ゴーレスという呼称はもとと一般的でな

かったことを伺わせる。イブン・マージドは十五世紀末に、ジャワ語では琉球人（アル・グル）がもたらす刀剣をリキウと称していたと記しているが（史料2a）、実際にはジャワを含むマレー語圏では、琉球人自体もリキウなどと称していたのではないだろうか。もしマレー語圏でも琉球人を一般的にゴースと称していたとすれば、一五一四年以降のポルトガルの同時代史料にも、ある程度はゴースという呼称が現れてもいいはずである。

イブン・マージドやスライマン・アル・マフリーの航海書の情報源は、(1) アラブ系航海者、(2) イラン系航海者、(3) ゲジャラートなどのムスリム航海者、(4) 南インド・スリランカのムスリム航海者、(5) ジャワ海のマレー系航海者であったとされる。おそらく琉球人＝ゴースという認識は、(1)～(4)のムスリム系航海者の情報に基づいていたのに対し、琉球の刀剣＝リキウ（史料2a）、琉球＝リキウ（史料4）という系統の知識は、(5)のマレー系航海者に由来するのではないか。

琉球人のマラッカ来航が途絶してからも、ポルトガル人はアユタヤやパタニなどで琉球人と直接に接する機会があり、また華人などを通じて琉球情報を得ることもできた。それによって、琉球＝レキオという呼称を知り、それによってマラッカ占領以前からムスリム海商を通じて知っていたゴースに代わって、レキオ／レキオスが定着したのである。そしておそらく、マレー語圏でもともとレキオ系の呼称が一般的に用いられており、このためゴースという呼称は、マラッカ占領から三年ほどたつと、急速に同時代史料から姿を消したと思われるのである。

それではこのゴースという呼称の語源は何であろうか。この問題については、ゴース論争が進展する過程で、さまざまな推説が提示されてきた。まずゴース＝日本人説をとる論者は、ゴースを日本国内の地名など

に比定しようと試みた。たとえば藤田豊八氏は、ゴールスは「倭人」(wo-ven)に由来するとみなした<sup>(87)</sup>。また前嶋信次氏は、ゴールスは「五島」の転訛であると推測し、岡本良知氏も、「川原」を肥前方言で「ゴウラ」ということから、五島列島の「川原浦」が語源ではないかとした<sup>(88)</sup>。さらに藤田豊八氏は、薩摩半島南部の「郡」<sup>(しほり)</sup>という地名に由来すると推定している。しかしこれらの諸説は、ゴールス＝日本人説自体が退潮するとともに過去のものとなつている。なお内田銀蔵氏はゴールスの語源は高麗であると説いたが、その具体的な考証は未発表のままに終わった。

一方、ゴールス＝琉球人説を最初に唱導した秋山謙蔵氏も、ゴールスは高麗の転訛であるとみなしている。秋山氏は十四世紀以来、多くの朝鮮人が琉球に漂着し、あるいは倭寇に拉致されて到来したことを指摘し、これらの朝鮮人が琉球船に同乗してマラッカに渡航したことから、琉球人までもが高麗人＝ゴールスと呼ばれるようになったと推定した<sup>(89)</sup>。これに対し、桑田六郎氏や安里延氏は、やはりゴールスの語源は高麗であるとしながらも、朝鮮人が琉球船でマラッカに來航したとは考えがたく、むしろムスリムやヨーロッパ人が琉球人を朝鮮人と区別せず、漠然とゴールスと呼んだのだと推測している<sup>(90)</sup>。またシャルル・アグノエル氏も、アラブ人は中国において朝鮮や琉球の商人と接触しており、両者を混同して、琉球人もアル・グール(＝高麗)と呼んだのだと説いた<sup>(91)</sup>。さらにゲオルグ・シユールハンマー氏もアグノエル氏などの見解に賛同し、アラブ人は琉球人を朝鮮人と混同してアル・グールと呼び、ポルトガル人も当初はアラブ人にならつてゴールスという呼称を用いたが、ほどなく華人を通じて琉球という本来の名称を知り、レキオ／レキオスと呼ぶようになったと論じている<sup>(92)</sup>。

このように、ゴールス＝琉球説をとる研究者は、その語源を高麗に求めることが多く、特にアラブ人やヨーロッパ人が、琉球人と高麗人を混同して、漠然とゴールスと呼んだという説が有力になつている。これに対し、

前嶋信次氏は戦後にゴレス＝琉球説を追認しながらも、その語源については、アラビア語で「低地」などを意味する、アル＝ガウル (al-Ghaur) に由来すると推測した<sup>(80)</sup>。

さらに近年、ゴレスの語源について新説を提唱したのが的場節子氏である。的場氏は、ゴレスとはモルッカ方面で、刀剣を意味する *goles* に由来すると論じる。的場氏によれば、一五五九ごろにポルトガル語で記されたモルッカ諸島情報に、「良質の鉄で作られた原住民の刀剣はゴレス *goles* とよばれる。片刃で西欧の刀剣よりも短く、柄に近い部分は細く先になるほど幅広である。……当地の刀剣は刃が重いので、人間を一振りでも切り倒せる」という記事があるという<sup>(81)</sup>。またマゼラン艦隊の乗員であったアントニオ・ピガフェッタ (Antonio Pigafetta) も、モルッカ諸島では剣を *pagan gole* と称すると記録している<sup>(82)</sup>。これよっての場氏は、イブン・マジードが伝える、中国の南方海上にあるアル・グール (史料 2a) とは、ボルネオ島かセレベス島を指し、その住民は刀剣＝*gole* を帯びていたため *Gores* と呼ばれたとみなす。そしてつねに刀剣を帯び、大量の日本刀をもたらした琉球人も、刀剣＝*gole* から転じて、やはり *Gores* と呼ばれたと推定するのである。最近では、上里隆史氏も的場氏の新説に賛同している<sup>(83)</sup>。

的場氏の新説は、琉球の主要輸出品であった刀剣をゴレスの語源とする、新しい着眼点を示しており、たしかにモルッカ語の刀剣＝*goles* と、ゴレス＝*Gores* は、一見するときわめて相似している。ただし前者は、モルッカ語で刀剣を意味する *gole* に、ポルトガル語の複数形語尾 *s* を附したものである。これに対し後者は、琉球を意味する *Gor* (アラビア語史料における *Ghur*) に、ポルトガル語で「人」を示す語尾 *s* を附したものである。したがって的場説によれば、モルッカ語の刀剣＝*gole* が *gor* に転じ、それにポルトガル人が *s* を附して、琉球人＝*Gores* という呼称が生じたことになる。ただし *gole* と *gor* では、発音はやや異なり、また琉球人がモ

ルッカ方面に渡航した記録もない。一方で琉球人が渡航していたジャワ方面では、彼らもたらず刀剣はリキールウと称されており（史料2a）、それが *sole* とも呼ばれたかどうかは不明である。またモルッカで用いられた *sole* が、尖端が幅広で、刀身の重量を利用して切り倒す、青竜刀タイプの刀剣であり、尖端が細身で、軽量な日本刀とは異なることも気になるところである。

## 六 ゴーレスⅡ高麗説と落漈説をめぐって

ゴーレスの語源をめぐる諸説のなかでも、アラブ人やヨーロッパ人が琉球を高麗と混同して、漠然とゴーレスと呼んだという見解は、歴史的文脈としては比較的無理がないように思われる。周知のように、南宋から元代にかけては、きわめて多数のムスリム海商が中国に來航し、特に最大の海外貿易港であった泉州は、蒲寿庚を代表とするムスリム海上勢力の拠点となった。<sup>(94)</sup> 一方、高麗と泉州・慶元（寧波）などの諸港との海上貿易も、宋元時代を通じて活発であり、ムスリム海商との接触も少なくなかったであろう。元代には泉州に居留するマラバルの王子が、高麗人女性を妻とし、高麗に使者を派遣したことも記録されている。<sup>(95)</sup>

これに対し宋元時代に中国に來航したムスリム海商が、日本人や琉球人に接する機会はほとんどなかった。このため十五世紀中期にいたり、ムスリム海商がマラッカなどに來航した琉球人と接触した際にも、彼らを中国の東方海上から到來した民族として、古くから知られていた高麗Ⅱアル・グールという名で呼んだとしても不思議ではない。そして十五世紀末にインド洋海域にいたったポルトガル人も、ムスリム航海者からアル・グール (*Al-Chur*) について知り、それを *Gor* と聞いて、さらに「人」を示す *es* という語尾をつけ、*Gores* と記録したと考

えられるわけである。

ただし高麗 $\equiv$ アル・グール $\equiv$ ゴース説の問題点として、高麗とアル・グールの発音がやや遠いことがある。「高麗」は韓国語ではコリョ (Goryeo)、元明時代の北方漢語ではカウリ (Kauli)、福建南部の閩南音ではカウレ (Kaule) となる。また十四世紀初頭にイル $\equiv$ ハン朝で成立した、ラシード・ウッディーン (Rasid al-Din) 『集史』 (*Jami' al-Tawarikh*) の「モンゴル史」では、高麗をカウリ (Kauli) と表記している。また同時期のマルコ・ポーロ (Marco Polo) も、やはり高麗をカウリ (Cauli) と記している<sup>(96)</sup>。これによれば西方世界では、高麗を同時代の北方漢語により Kauli と称しており、それが Ghur に転訛したとすると、語頭の K 音が Gh 音に変化していることなど、やや不自然な感もある。一方、十六世紀中期にポルトガル人が作成した航海路程記には、日本人は高麗 (Coray) に交易に赴くが、そのほかにコーレ (Core) と呼ばれる群島があり、そのなかの大島が朝鮮 (Chausien) と呼ばれる、という記事がある<sup>(97)</sup>。情報自体は混乱しているが、Cooray は高麗の日本音、Core はその中国音に由来している。この Core 系の呼称が、Ghur に転じることは考えられるだろう。

一方で筆者は、従来ほとんど顧みられていない、アル・グール (al-Ghur) を、アラビア語のアル・ガウル (al-Ghaur/Ghawr) の転訛と説く前嶋信次説にも、再検討の価値があるのではないかと考えている。前嶋氏によれば ghaur とは、「低地に下る」・「(水などが) 地中に消える」ことを意味する ghara という動詞から派生し、「底」・「低地」・「地中に消えるもの(水)」を意味するという。アラビア文字では母音を表記しないので、ghaur と Ghur のつづりは同じであり、Gh + w + r と g + u + r の二つの子音で表記されるが、特に ghaur とあることを明示するために<sup>(98)</sup>は、子音 Gh の上に、母音 a の附加を示す註音符号 (ファトハ) を書きくわえる。

イブン・マージドは『航海学の基礎に関する有益情報』において、アラビア半島西部の、ヒジャーズ (Hijaz)

の山脈と紅海とのあいだに南北につらなる低地を、アル・ガウル (al-Ghaur) と称しており、「すべて高い場所をナジウド (Najid) とよび、すべて落ちくぼんでいる場所をティハーマ (Tihamah) やガウルとよぶ」と説明している。<sup>(10)</sup> また十四世紀前半のイブン・バットウータ (Ibn Battuta) も、ヨルダンからシリアにかけて南北にのびる地溝帯を、やはりガウルと称し、「ガウルは、いくつかの高地の「連なる」山間の渓谷である」と述べている。<sup>(11)</sup> このようにガウルとは、帯状につらなる低地を意味しており、前嶋氏は中国史料にあらわれる、澎湖諸島と台湾のあいだにある、海水が急激に落ちこむ場所とされる「落漈」<sup>(らくさい)</sup> が、アラビア語でアル・ガウル al-Ghaur と表現されたと推定している。そしてアル・ガウル al-Ghaur とつづりが同じアル・グール (al-Ghur) が、「落漈」の附近にあると考えられた琉球の名称に転化したと考えるのである。

前嶋説は一見するとやや牽強附会のようにも思われるかもしれない。ただし前嶋説に関連して、アル・グールという呼称の初見である、一四六二年のイブン・マージド『海洋学原理集要』には、前述のように次のように記している(史料1)。「それらの次がジートゥーン(泉州)であることをご承知あれ。かの人々の帝王の都はカンバリーク(北京)と呼ばれている。この地方から南にゆけば、あるものといえは危険とアル・グールだけだ」と。このアル・グールは、一般には琉球を指すと考えられているが、泉州の南方海上に存在する事物として、「危険」と「琉球」を並列することは、やや唐突にも感じられる。文脈的にはこれを、「危険」と「落漈」と解することもできそうである。

イスラム史料では、明代以降も北京をカンバリーク、泉州をジートゥーンと表記しているが、そのことはイスラム圏における中国認識が、おもに元代に得た情報に由来していることを示唆している。上記のイブン・マージドの記事も同様であろう。一方で中国史料における代表的な「落漈」情報は、『元史』瑠求伝の冒頭にある次の

ような記事である。

瑠求は南海の東に在り。漳・泉・興・福の四州の界内なる澎湖諸島は、瑠求と相對するも、亦た素より通じず。……西・南・北岸は皆な水にて、澎湖に至れば漸く低く、瑠求に近づけば、則ちこれを落漈と謂う。漈とは水の趨なぐれお下ちて回かえらざるなり。凡そ西岸の漁船、澎湖已下に至り、颶風の發作するに遇わば、落漈に漂流し、回る者は百に一なり。<sup>(10)</sup>

この瑠求とはいわゆる琉球（大琉球）ではなく、台湾（小琉球）を指している。福建沿岸の漳州・泉州などから澎湖諸島に向かうと、水面はしだいに低くなり、瑠求に近づけば、海水が流れ落ちて戻らない落漈がある。福建西岸の漁船が澎湖諸島を過ぎて暴風にあい、落漈に落ちこめば、百隻に一隻も生還しないという。

イブン・マージドが伝える、「泉州の南方海上に航海すれば、危険とアル・グールしかない」という記述は、『元史』瑠求伝の落漈の記事と、たしかに共通性が強い。この落漈とは、具体的には澎湖諸島をはさんで台湾海峡を黒潮の分流が北上する、黒水溝という航海の難所を指している。<sup>(11)</sup> この黒水溝は、「その深さは底無く、水は黒くして墨の如く、湍激にして悍怒、勢は稍や窪めるが如し」と称され、アラビア語の al-Chaur のイメージとも共通する。さらに中国から琉球に渡る途中で、大陸棚が急激に落ちこみ海流が強くなる海域も黒水溝と称され、それが台湾海峡の落漈と混同されることもあったという。<sup>(12)</sup> 元代に泉州に來航したムスリム海商が、その南方海上にあるという落漈の伝承を聞き、それを「海水が落ちこむところ」を意味する al-Chaur と表現し、それが同じつづりの al-Ghur として伝えられた可能性もあるのではないか。

なお琉球王国とマラッカ王国の通交が始まったのは、一四六〇年前後のことであった。<sup>(13)</sup> ちょうどイブン・マージドが『海洋学原理集要』を執筆したところから、ムスリム海商はマラッカで琉球人と直接に接触するようになって

たのである。一方、イブン・マージドが一四九〇年までに執筆した『航海学の基礎に関する有益情報』では、アル・グールは明らかに琉球を指している。もしアル・グールが元來は落濤を指していたとすれば、一四六〇年から一四九〇年の間に、それが琉球の呼称として転化し、定着したのであろう。

本節ではアル・グール⇨ゴーレスの語源について、高麗説と落濤説を紹介・検討した。ゴーレス語源問題については、このほかに的場氏の刀劍(ご) 由来説などの諸説もある。ただし現時点では、どの見解についても決定的な史料の根拠はなく、発音の類似と、傍証史料による推論の域にとどまらざるをえない。高麗説については、高麗が *Chur* に転訛する可能性があるかどうか、落濤説については、アラビア語で落濤／黒水溝のような海域を *Ghur /Ghur* と称するかどうかの問題になるだろう。今後は各国語史料から、この問題をめぐってより確実な論拠が発見されることを期待したい。

### おわりに

本稿では百五十年以上の研究史がありながら、近年まで停滞がつついていたゴーレス論争について、先行研究の見解を紹介するとともに、関連するアラビア語・ポルトガル語などの史料をできるだけ網羅的に紹介・検討することを試みた。現段階では、ゴーレスという呼称の語源について確実に論証することは難しい。それでも本稿での考察を通じて、ただし琉球人の貿易活動がムスリム海商やヨーロッパ人に認識される過程で、彼らがアラビア語、ついでポルトガル語史料でゴーレスと呼ばれるようになり、やがてレキオスと称されるようになった経緯を、おおむね明らかにすることができたと考えている。

ゴレスというポルトガル語の呼称は、アラビア語のアル・グールに由来する。中国の南方海上にあるというアル・グールへの言及は、一四六二年のイブン・マージドの航海書に最初に確認される。このアル・グールは琉球ではなく、台湾海峡の「落滌」を指す可能性もあるが、十五世紀末のイブン・マージド、十六世紀初頭のスライマン・アル・マフリーの航海書では、あきらかに琉球を指すアル・グール情報が記されている。ここでは日本情報との混同も含みながら、アル・グール＝琉球が、中国東南海上の島であり、活発な交易活動を推進し、マラッカに黄金や刀剣もたらしていたことが記録されている。さらにスライマン・アル・マフリーは、アル・グールがリキユ＝琉球とも呼ばれることも指摘していた。

そして十五世紀末からインド洋海域に進出したポルトガル人も、おそらくムスリム航海者を通じて、早くからアル・グール情報に接していたと思われる。一五一〇年のルイ・デ・アラウジョの書簡にはじまり、翌年にマラッカを占領したアフォンソ・デ・アルブケルケの書簡など、一五一〇～一三年のポルトガル語史料では、琉球人をすべてゴレスと称している。この時期の原史料にもとづいて編纂された、『アルブケルケ実録』もほぼ同様である。これらの同時代的史料では、マラッカに來航していたゴレス＝琉球人の貿易活動がかなり具体的に記録され、その内容は『歴代宝案』などの琉球史料とも一致する。

ところが一五一四年のルイ・デ・ブリトの書簡からは、ポルトガル語の同時代史料では琉球人をゴレスではなく、もっぱらレキオス（レケオス）と称するようになる。同時期に執筆されたトメ・ピレス『東方諸国記』でも、基本的にレキオスを用いており、ゴレスはその異称として言及されるだけである。その一方、イタリア人ジョヴァンニ・ダ・エムポリは、ゴリ（ゴレス）とレチ（レキオス）を異なる人々とみなし、こうした認識はスペインが派遣したマゼラン艦隊にも継承されていた。おそらくゴレスとは、おもにインド洋方面のイスラム

圏において用いられた呼称であり、東南アジアのマレー語圏ではそれほど一般的ではなかったのではないか。ポルトガル人がマラッカを拠点にジャワ海域・南シナ海域に進出し、マレー人・華人との交流が増加し、さらには琉球人自身とも接触するようになるにつれて、マラッカ以東では一般的であったレキオスという呼称を用いるようになったと考えられるのである。

それではゴレスという呼称の語源はなんだろうか。南宋から元代にかけては、多くのムスリム海商が中国に來航しており、同時に中国と高麗との海上貿易も活発であった。ムスリム海商によって高麗人はよく知られた存在であり、このためムスリム海商が、十五世紀にマラッカに來航した琉球人を高麗人と混同して、漠然とアル・グールと称した可能性がある。ただし『集史』や『東方見聞録』では、高麗は *Kauli* (*Cauli*) と記されており、*Chur* とは音がやや遠い。このほかに元代に泉州方面に來航したムスリム海商が、台湾海峡の「落滌」を、アラビア語で低地帯・地溝帯を意味する *Chaur/Chur* と称し、それが「落滌」のかなたに位置する琉球の名称に転化したことも想定される。またゴレスはモルッカ語で刀剣を意味する *gole* に由来するという説もあるが、現時点ではどの見解にも決定的な論拠はなく、語源を確定することは難しい。

以上のように本稿では、おもにゴレスという呼称の由来と伝流に注目して、関連するアラビア語やポルトガル語などの史料を検討してきた。一五〇〇年前後のマラッカは、インド洋海域と、ジャワ海域・南シナ海域を結ぶ、海域アジア最大の結節点であり、十六世紀初頭には、ポルトガル人の占領によってムスリム海商の來航が急減する一方、ヨーロッパと直接結びつけられることになった。そしてマラッカは、海域アジア全域の商品が集散する拠点であるとともに、海商たちがもたらす海外情報が集散する場でもあった。海域アジアの東端に位置する琉球の情報も、マラッカを通じてインド洋海域のイスラム圏へ、さらにはヨーロッパへと伝えられたのである。

これらの琉球情報には、本稿で論じた呼称問題だけではなく、マラッカに來航した琉球人の貿易活動や航海についてもさまざまな情報が含まれている。最近ではポルトガル語の琉球情報としては、もっぱらもつとも詳細な『東方諸国記』だけが利用されているが、このほかの関連史料にも、有意義な独自の記事が少なくない。このような諸国語史料に記された琉球王国のマラッカ貿易の実態については、稿をあらためて検討することにした。

## 注

- (1) たとえば古琉球期の海外通交に関する最新の研究史整理である、上里隆史「琉球王国の形成と展開」(桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、二〇〇八年)でも、ゴース論争に関する論考は言及されていない。また同じく近刊の岡本弘道「琉球王国海上交渉史研究」(榕樹書林、二〇一〇年)の参考文献にも、ゴース論争に関わる論考はほとんど挙げられていない。ゴース論争の概略を紹介した比較的新しい研究としては、真栄平房昭「南蛮貿易とその時代」(『新琉球史——古琉球編——』琉球新報社、一九九〇年)二六五―二六八頁がある。
- (2) トメ・ビレス(生田滋他訳注)『東方諸国記』(岩波書店、一九六六年)、「補注」五七三―五七四頁、「ゴース人に関するコメントリオスの記事」。
- (3) John Crawford, *A Descriptive Dictionary of the Indian Islands & Adjacent Countries*, London: Bradbury & Evans, 1856, pp.163-164. 内田銀蔵「シラの島及ゴースに就きて」(初出一九一五―一七年)『内田銀蔵遺稿全集』第四輯・史学理論、同文館、一九二二年)四四九―四五五頁参照。
- (4) Braz de Albuquerque (trans. by Walter de Gray Birch), *The Commentaries of the Great Alfonso Dalboquerque, Second Viceroy of India*, vol.3, London: Hakluyt Society, 1880, p.14. 内田前掲「シラの島及ゴースに就きて」四四八―四四九頁参照。
- (5) Johann Justus Rein, *Japan nach Reisen und Studien*, Leipzig, [s.n.], 1886, Bd. 2, pp.609-610. 内田前掲「シラの島及ゴースに就きて」四五六―四五八頁参照。
- (6) Richard Stephen Whiteway, *The Rise of Portuguese Power in India 1497-1550*, Westminster: A. Constable, 1899, p.141. 内田前掲「シラ

の島及ゴレスに就きて」四五八～四五二頁参照。

- (7) Gabriel Ferrand, "Malaka: le Malayu et Malayur." *Journal Asiatique*, t.12, 1918, pp.126-33. 'l'île de ghar = Licou-K'ieou = Formosa.'
- (8) 高桑駒吉「欧州人渡来以前足利時代に於ける南蕃交通の形跡」『史学界』二卷一一号、一九〇〇年。
- (9) 柴謙太郎「日本人は最初何処にてポルトガル人と接触せしや」(『歴史地理』一四卷一号、一九〇九年)、川島元次郎「徳川初期の海外貿易家」(朝日新聞社、一九一六年)二二〇～二二八頁。
- (10) 藤田豊八「欧勢東漸初期に於ける海外の日本人」(初出一九一四年、『東西交渉史の研究 南海篇』岡書院、一九三二年所収)。
- (11) 内田前掲「シラの島及ゴレスに就きて」。なお日本人の先行研究を紹介した第十六節以下は、『内田銀蔵遺稿全集』第五輯・内田銀三講論集(同文館、一九二二年)に再録されている。
- (12) 秋山謙蔵「Goresは琉球人である」(『史学雑誌』三九編三号、一九二八年)、同「Goresなる名称の発生とその歴史的發展」(『史学雑誌』三九編一二号、一九二八年)。また同「室町時代に於ける琉球の印度支那諸国との通交」(『歴史地理』五六卷六号、一九三〇年)も参照。
- (13) Charles Haguenauer, "Mélanges Critiques," IV 'les Gores,' *Bulletin de la Maison Franco-Japonaise, Série Française*, t.2, no. 3-4, 1930.
- (14) 前嶋信次「ゴレス攷」(初出一九三二年、同『東西文化交流の諸相』誠文堂新光社、一九七一年所収)。
- (15) 岡本良知「所謂ゴレス問題への一寄与」(『歴史地理』六〇卷四号、一九三二年)。
- (16) 桑田六郎「ゴレスは五島か」(『南方土俗』二卷二号、一九三二年)。
- (17) 藤田元春「日支交通の研究 中近世篇」(富山房、一九三八年)、第二章「シラの島及びゴレス」。
- (18) 秋山謙蔵「日支交渉史話」(内外書籍、一九三五年)、一六「ポルトガル人のマラッカ占拠とゴレス」、一七「琉球人の南海發展とゴレス」、一八「ゴレスと琉球人」。
- (19) 小葉田淳「琉球滿刺加間の通商関係に就いて」(初出一九三五年、同『中世南島通交貿易史の研究』日本評論社、一九三九年所収)。
- (20) 岡本良知「十六世紀日欧交通史の研究」(六甲書房、一九三六年)八〇～九八頁、七八六～七九一頁。
- (21) 安里延「日本南方發展史——沖縄海洋發展史——」(三省堂、一九四一年)第十九章「欧勢の東漸と琉球人」。
- (22) 前嶋信次「ゴレスについて」(初出一九六一年、同前掲『東西文化交流の諸相』所収)。

- (23) Armando Cortesão, "The first account of the Far East in the Sixteenth Century: The name "Japan" in 1513," in *Comptes rendus du Congrès international de géographie, Amsterdam 1938*, Leiden: E.J. Brill, 1938. この論文については、岡本良知氏が「十六世紀日欧交通史の研究」の増補改訂版（六甲書房、一九四二年）七九八～八〇一頁で紹介している。
- (24) Armando Cortesão (trans. and ed.), *The Suma Oriental of Tomé Pires and the book of Francisco Rodrigues*, London: Hakluyt Society, 1944.
- (25) トメ・ピレス（生田滋他訳注）『東方諸国記』（大航海時代叢書V）岩波書店、一九六六年。
- (26) 的場節子『シパンガと日本 日欧の遭遇』（吉川弘文館、二〇〇七年）第三章「南蛮金と日本刀交易」。
- (27) Georg Schurhammer S. I., "O descobrimento do Japão pelos Portugueses no ano de 1543," *Primeira Parte, "Supostas ou reais notícias do Japão antes de 1543,"* 9. Lêquios e Gores (1462-1544), in Georg Schurhammer, *Orientalia*, Lisboa: Centro de Estudos Históricos Ultramarinos, 1963. 以下、Schurhammer, "O descobrimento"と略称。次節以下で紹介する史料の多くは、シュールハンマー氏の論文で紹介されているが、直接にこの論文から転引した史料以外は、煩を避けていちいち注記しない。
- (28) Schurhammer, "O descobrimento do Japão antes de 1543"のうち、ポルトガル人の日本到達に関する、*Segunda parte, "O descobrimento do Japão pelos Portugueses (1543)"*の概要は、岸野久『西洋人の日本発見』（吉川弘文館、一九八九年）三〇～三二二頁に紹介されている。
- (29) Ferrand, "Malaka," pp.126-33, 'L'île de ghir = Lieou-K'ieou = Formosa.'
- (30) Gabriel Ferrand, *Instructions Nautiques et Routiers Arabes et Portugais des XIe et XIIe Siècles*, t. 1-2, Paris: P. Geuthner, 1921-1928.
- (31) 前嶋掲「コーレス放」同「コーレスにこうぶ」。
- (32) Gerald Randall Tibbets, *Arab Navigation in the Indian Ocean before the Coming of the Portuguese*, London: Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, 1971. 以下、Tibbets, *Arab Navigation*と略称。
- (33) Tibbets, *Arab Navigation*, pp.7-24. また家島彦一「イスラーム・ネットワークの展開」（石井米雄編『東南アジア近世の成立』岩波講座東南アジア史・第三巻、岩波書店、二〇〇一年）三二～三九頁を参照。
- (34) Tibbets, *Arab Navigation*, pp.24-25. なおマーシドの著作名の和訳は、家島掲「イスラーム・ネットワークの展開」三四頁に462。
- (35) 前嶋「コーレスについて」六六六～六七頁、家島掲「イスラーム・ネットワークの展開」三三頁など。

- (36) Tibbets, *Arab Navigation*, p.9. なおガマ自身の記録では、マリンデイからの水先案内人をキリスト教徒のインド人と記している。ガマ「インド航海記」(『コロンブス、アメリカ、ガマ、バルボア、マゼラン 航海の記録』大航海時代叢書1、岩波書店、一九六五年)三七六―三八四頁。ただし実際には、この水先案内人は無名のグジャラート人だったようだ。Sanjay Subrahmanyam, *The Career and Legend of Vasco da Gama*, Cambridge: Cambridge University Press, 1997, 121-128.
- (37) 前嶋「ゴレスについて」六六七―六六八頁。
- (38) Tibbets, *Arab Navigation*, pp.25-41.
- (39) 前嶋「ゴレスについて」六六七頁。Tibbets, *Arab Navigation*, p.220 参照。なお前嶋氏の訳文では al-Sin を「シナ」と訳すが、本稿では煩を避けて「中国」に統一する。ポルトガル史料の China についても同様である。
- (40) Tibbets, *Arab Navigation*, p.224.
- (41) Tibbets, *Arab Navigation*, p.234-235.
- (42) Tibbets, *Arab Navigation*, p.364-369. 家島彦一『海域から見た歴史 インド洋と地中海を結ぶ交流史』(名古屋大学出版会、二〇〇六年)五八―六一頁。
- (43) Tibbets, *Arab Navigation*, pp.41-42. 詳しくは、栗山保之「ポルトガル来航期のインド洋におけるアラブの航海技術——スライマン・アルマフリーの航海技術書の検討より——」(初出二〇一〇年、同『海と共にある歴史 イエメン海上交流史の研究』中央大学出版部、二〇一二年)を参照。なおアル・マフリーの著作名の和訳も同論文による。
- (44) 前嶋「ゴレスについて」六六八頁。ただし最初の一文は Ferrand, "Malaka", p.127 の仏訳により補った。
- (45) 前嶋「ゴレスについて」六六四―六六六頁。Tibbets, *Arab Navigation*, pp.44-46.
- (46) Tibbets, *Arab Navigation*, p.43.
- (47) 前嶋「ゴレスについて」六六九頁。
- (48) 小葉田前掲「琉球満刺加間の通商関係に就いて」五二四―五二九頁。
- (49) ポルトガル領インディアの形成過程に関する簡明な概説として、トメ・ピレス前掲『東方諸国記』の、生田滋「解説」一一―一六頁、および生田滋「東南アジアの大航海時代」(石井前掲『東南アジア近世の成立』)を参照。
- (50) なおポルトガル・南欧史料のなかには、岡本良知氏が前掲「所謂ゴレス問題への一寄与」や、『十六世紀日欧交通史の研究』

- において、文語体の摘訳を附したり、要旨を記しているものも少なくない。訳出にあたってはそれらも適宜参照したが、煩を避けて特に注記していない。
- (51) 詳しくはジョアン・デ・バロス(生田滋・池上岑夫訳注)『アジア史』一(大航海時代叢書第Ⅱ期2)岩波書店、一九八〇年、三五七～三八三頁参照。
- (52) ジョアン・デ・バロス(生田滋・池上岑夫訳注)『アジア史』二(大航海時代叢書第Ⅱ期3)岩波書店、一九八一年、生田滋「補注」一、四三二～四三六頁。原文: *Cartas de Afonso de Albuquerque, Seguidas de Documentos que as Elucidam*, t. III, Lisboa: Academia Real das Ciencias, 1892, pp.223-224.
- (53) 詳しくはバロス前掲『アジア史』一、三三～九二頁、ドレス前掲『東方諸国記』四七三～七九八頁参照。
- (54) *Cartas de Afonso de Albuquerque, Seguidas de Documentos que as Elucidam*, t. I, Lisboa: Academia Real das Ciencias, 1884, pp.64-65. 英訳: T. F. Earle & John Villiers eds., *Albuquerque, Caesar of the East. Selected Texts by Alfonso de Albuquerque and his Son*, Warminster: Arts & Phillips, 1990, p.149.
- (55) Armando Cortesão (trans. and ed.), *The Suma Oriental of Tomé Pires and the Book of Francisco Rodrigues*, vol. II, pp.290-305, 'the Book of Francisco Rodrigues'; Armando Cortesão (leitura e notas), *A Suma Oriental de Tomé Pires, e o Livro de Francisco Rodrigues*, Coimbra: Orden da Universidade, 1978, pp.103-128, 'o Livro de Francisco Rodrigues.'
- (56) *Corpo Diplomatico Portuguez: Contendo os Actos e Relações Politicas Diplomaticas de Portugal e com as Diversas Potencias do Mundo, desde o Seculo XVI até aos Nossos Dias*, t. I, Lisboa: Academia Real das Ciencias, 1862, p.197. 原文はラテン語。内田前掲「ミラの島及びゴーストにめぐって」四二二頁に引く。W. Noel Sainsbury ed., *Calendar of State Papers, Colonial Series, East Indies, China and Japan, 1513-1616*, London: Longman, 1862, 所収の英訳により訳出した。
- (57) 小葉田前掲「琉球満刺加間の通商関係に就いて」五二八～五二九頁。
- (58) バロス前掲『アジア史』一、生田滋「解説」五八二頁。
- (59) バロス前掲『アジア史』二、生田滋「補注」四、四四六頁。原文: *Cartas de Afonso de Albuquerque*, t. I, p.138.
- (60) 生田滋『大航海時代とモルッカ諸島——ポルトガル、スペイン、テルテナ王国と丁子貿易——』(中央公論社、一九九八年)二六～二八頁。

- (61) Braz de Albuquerque, *The Commentaries of the Great Afonso Dalboquerque*, vol. I, "Introduction," p. ii-v.
- (62) Braz de Albuquerque, *Comentarios do Grande Afonso de Albuquerque*, Lisboa: Regia Officina Typografica, 1774, np. Lisboa: Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1973, pt. III, ch. XVIII, pp.93-94. 英訳：Braz de Albuquerque, *The Commentaries of the Great Afonso Dalboquerque*, vol. III, ch. XVIII, pp.84-85.
- (63) *Comentarios do Grande Afonso de Albuquerque*, pt. III, ch. XVIII, pp.94-95. 英訳： *The Commentaries of the Great Afonso Dalboquerque*, vol. III, ch. XVIII, pp.85-86.
- (64) ビレス前掲『東方諸国記』「生田滋」補注」十、五七三頁。原文： *Comentarios do Grande Afonso de Albuquerque*, pt. III, ch. XVIII, pp.97-98. 英訳： *The Commentaries of the Great Afonso Dalboquerque*, vol. III, ch. XVIII, pp.88-89. なおトーレスが「みたらす商品」の「す」れば、 *fusseria* とは河口や鉱山で採集される砂状の金銀を指すこと。
- (65) アラビマ語では子音の P のかわりに F を用いる「P」が多々、Farydk と Pariydk と Pericoo に通じることを考えられぬ。Schurhammer, "O descobrimento," p. 519, note 269 参照。
- (66) *Comentarios do Grande Afonso de Albuquerque*, pt. III, ch. XXXII; pt. III, ch. XXXVII; pt. IV, ch. XLVIII.
- (67) 岡本前掲『十六世紀日欧交通史の研究』九九―一〇四頁。
- (68) *Cartas de Afonso de Albuquerque*, t. III, p.223.
- (69) Schurhammer, "O descobrimento," pp.513-518.
- (70) ビレス前掲『東方諸国記』二四八―二四九頁。
- (71) ビレス前掲『東方諸国記』「生田滋」解説」一七―二二頁。
- (72) ビレス前掲『東方諸国記』「生田滋」解説」二二―二五頁。
- (73) Marco Spallanzani, *Giovanni da Empoli: Mercante Navigatore Fiorentino*, Firenze: Studio Per Edizioni Scelte, 1999, pp.181. 英訳： Laurence A. Noonan, *John of Empoli and the Relations with Afonso de Albuquerque*, Lisboa: Instituto de Investigação Científica Tropical, 1989, p.210.
- (74) Noonan, *John of Empoli and the Relations with Afonso de Albuquerque*, pp.13-14.
- (75) マゼラン艦隊の航海記録におけるレキオス情報については、合田昌史『マゼラン：世界分割を体現した航海者』（京都大学学

- 術出版会、二〇〇六年）一六七～一八四頁を参照。
- (76) Francisco de S. Luiz, *Obras Completas do Cartedá Saravá*, VI, Lisboa: Imprensa Nacional, 1876, pp.125-126. なおこのテキストでは、元来の写本における 'guorros' (ゴロス) を 'mogores' (モンゴル人) と校訂している。長南実訳「マガリヤンイス最初の世界一周航海」(前掲『コロンブス、アメリカ、ガマ、バルボア、マゼラン 航海の記録』)の、増田義郎「補注」七〇〇～七〇二頁の訳文も、この解釈に従っている。しかしこれは原文の *guorros* のままにすべきである。
- (77) Schutthammer, "O descobrimento," p.515, note 227.
- (78) Schutthammer, "O descobrimento," p.515-516 に引用する、トルレ・ド・トンボ文書館所蔵文書 (Gavetas 15-10-43)。
- (79) Damiao de Góis, *Crónica do Felicissimo Rei D. Manuel*, pt. IV, Coimbra: Omprensa da Universidade, 1926, p.56.
- (80) 家島前掲「イスラーム・ネットワークの展開」三四～三五頁。
- (81) 藤田前掲「欧勢東漸初期に於ける海外の日本人」一四七頁。
- (82) 前嶋前掲「ゴレス攷」六四二～六四七頁。
- (83) 岡本前掲「所謂ゴレス問題への一寄与」三三六～三六一頁。
- (84) 藤田前掲「シラの島及びゴレス」五九～七八頁。
- (85) 内田前掲「シラの島及びゴレスに就きて」三四八～三四九頁。
- (86) 秋山前掲「Gores なる名称の発生とその歴史的発展」。
- (87) 桑田前掲「ゴレスは五島か」一一～一三頁、安里前掲「日本南方発展史」三五八～三六一頁。
- (88) Charles Haguenaueur, "Encore la question des Gores," *Journal Asiatique* 226, 1935, pp.83-85.
- (89) Schutthammer, "O descobrimento," p.520-522.
- (90) 前嶋「ゴレスについて」六七〇～六七二頁。
- (91) 的場前掲『ジバングと日本』九四頁。原史料はリスボン国立図書館蔵、ガブリエル・レベージョ (Gabriel Rebello) のモルッカ諸島情報写本 (架蔵番号 Ms.199, No. 41, f.20)。
- (92) 前掲「マガリヤンイス 最初の世界一周航海」六四二頁。
- (93) 上里隆史『琉日戦争一六〇九 島津氏の琉球侵攻』(ポーターインク、二〇〇九年) 四三頁、同『海の王国・琉球 「海域アジ

- ア」屈指の交易国家の実像』一〇〇頁。
- (94) 古典的業績として、桑原隲藏『蒲寿庚の事績』（岩波書店、一九三五年、『桑原隲藏全集』第五卷、岩波書店、一九六八年として再刊）を参照。
- (95) 陳高華「北宋時期前往高麗貿易的泉州船商」（『海交史研究』一九八〇年八期）、「元朝与高麗的海上交通」（初出一九九一年、同『元史研究新論』上海社会科学出版社、二〇〇五年所収）。
- (96) 陳高華「元代來華馬八兒王子孛八里新考」（初出一九八〇年、同『元史研究論考』中華書局、一九九一年所収）。
- (97) Rashiduddin Fazlullah (trans. and annot. by W. M. Thackston), *Jami'u'l-tawarikh (Compendium of Chronicle), A History of the Mongols*, pt.2, London: I. B. Tauris, 2012, p.440, p.478.
- (98) *The Book of Ser Marco Polo* (trans. and ed. by Henry Yule), London: John Murray, 1902, p.343, p.345, note 2.
- (99) 岡村良知「十六世紀における日本地図の発達」（八木書店、一九七三年）四〇頁、註（83）。
- (100) 前嶋「ゴージェスについて」六七〇頁。
- (101) 前嶋「ゴージェスについて」六七〇頁。英訳はTibbets, *Arabic Navigation*, p.217-218. なおティベッツ氏は、この箇所もアル・ガウル (al-Chaur) ではなく、Gh にファトハをつけなく、アル・ゲール (al-Ghur) と表記している。前嶋氏とティベッツ氏は、いずれも同一のバリ国立図書館写本を底本としており、ティベッツ氏の表記がなんらかの校訂の結果かどうかは不明である。
- (102) イブン・バットゥータ（家島彦一訳）『大旅行記』1（平凡社、一九九六年）一八六、一九六頁。二九八頁、註（27）。
- (103) 『元史』卷二百十一、列伝九十七、外夷三、瑠求伝。前嶋「ゴージェスについて」では、落捺に関して、清代中期の黄叔瓚『台海使槎録』の記事を引用するが、これも『元史』の記述を祖述したものである。
- (104) 曹永和「早期台湾の開発与経営」（初出一九六三年、同『台湾早期歴史研究』聯経出版事業公司、一九七九年）一一八～一一九頁。
- (105) 嘉慶『統修台湾県志』卷一、地志、海道。曹永和前掲「早期台湾の開発与経営」一一九頁参照。
- (106) 山内晋次「近世東アジア海域における航海信仰の諸相——朝鮮通信使と冊封琉球使の海神祭祀を中心に——」（『待兼山論叢』史学編、四二号、二〇〇八年）二一～二九頁。
- (107) 小葉田前掲「琉球満刺加間の通商関係に就いて」五〇三～五〇七頁。